

授業実践ヒント集

2020年、全国学校図書館協議会では「情報活用授業コンクール」を立ち上げました。これは、学習指導要領に「学校図書館を計画的に活用し授業改善に生かす」とされているように、読書センター・学習センター・情報センターとしての学校図書館の機能をいかし、児童生徒の個別最適、協働的な多様な学びを支援し、情報活用する授業実践、探究学習の展開を促すことを目的としています。

これまでの5年間で応募された多くの実践から情報活用のヒントをまとめました。

- ① 多様な場面、多様な情報源
- ② 系統的な情報活用指導
- ③ 教科横断的な取組み
- ④ 外部機関との連携
- ⑤ 著作権と出典に関する指導

小規模校でも大規模校でも

きめ細やかな情報活用の指導に

学年全体で、学校全体で

教科横断的授業が増加

校長の応募も

北海道から九州まで

複数の教員での授業

学外の指導関係者の多様化

5年間の
広がり

教員も、司書教諭も、学校司書も

学校図書館を活用する教科が多様化

こんな工夫！こんなアイデア！どんな学習でも！

主催 (公社)全国学校図書館協議会

協賛 キハラ株式会社

後援 文部科学省 (一社)日本教育情報化振興会 (一社)日本新聞協会 (公財)文字・活字文化推進機構

1

多様な場面、多様な情報源

●いろいろな教科・教育活動での実践

学校図書館での情報活用というと国語・社会・総合などを思い浮かべることが多いかもしれないが、コンクールの応募実践を見ると実に多岐にわたっている。

〈中 数学科〉 各種統計データの収集を学校図書館に依頼して、データを活用したグラフの学習

〈中 美術科〉 学校司書と連携して多様な情報収集を行い、ジェンダーフリーな制服を考える

〈理科〉 地層・生物・宇宙などたくさんの実践がある

〈英語科〉 国際理解・異文化交流も

〈家庭科〉 郷土料理調べ

〈保健体育科〉 健康や体のづくり

* 委員会活動など教科以外の教育活動での実践も多い

●多様な情報源を使った情報活用能力の育成

いろいろな情報源の特質の学習をしたり、活用を考えたりしている学校も多い。

新聞〈小〉 小学校の教科書には新聞が扱われているが、実際の新聞を見たことがない児童も多いので、新聞博物館からいろいろな新聞の実物を借りて、新聞学習を進める

辞典〈高〉 国語辞典の「恋愛」についての記述を、版をおって並べて例示し、時代の変遷を考えながらジェンダーについて考える

新聞〈高〉 複数の新聞を比較しながら、情報やメディアについて考えさせる

雑誌〈中〉 複数の雑誌を比較し、それぞれの特徴を考えさせ、情報やメディアについて考えさせる

Web〈高〉 ICT 担当と連携し、インターネットの特質や活用と注意点などを指導する

外部の施設・体験・インタビューなど 博物館等を利用したり、企業の体験学習を利用したりする。また、地域のお店の人に聞く、端末を使ってインタビュー・アンケートをするなど、人から情報を得る活動も

●児童生徒一人ひとりの探究心を刺激

〈小 理科〉 1年間の学習の最後に、児童がそれぞれ自分の興味関心のある事柄を選び、自由に追究する

〈中 社会科〉 各学期の学習の最後に、生徒自身がさらに追究したいことを選び、夏休みや冬休みに公共図書館とも連携しながら調べる

自校の児童生徒の実態をよく把握し、それに合わせて計画を組み、児童生徒が楽しく意欲的に学習している実践が多数応募されている。

児童生徒が自由に調べるテーマを決めるとなると内容が多岐にわたるので、学校図書館や公共図書館等との連携を密にすることに留意されている点も重要である。

●特別支援級・特別支援学校における実践

〈中〉 学校司書が生徒に合わせた絵本を集め、地図も使って、世界の国を知る学習

〈中〉 学校司書が担当教員と相談しながら、生徒の実態に合わせた調べ方やまとめ方の指導プログラムを考える

それぞれの児童生徒への配慮や工夫がされている特別支援級・特別支援学校の実践が複数応募されている。特別支援学校と各学校の支援級が連携して指導に取り組んだ例もある。

●授業者と学校図書館の連携が核に

先に紹介した〈美術科〉ジェンダーフリーな制服を考える授業のように、学校図書館(司書教諭・学校司書)と教科担当がきめ細かい連携を取った実践が多数応募されている。授業担当者だけでなく、司書教諭や学校司書からの応募も多い。

〈小〉 郷土学習において地域の外部機関も紹介し、学校司書が事前の打合せのみならず、途中で何度も授業の進展を担当と確認しながら、学校図書館の対応を追加・変更

〈中〉 各学年の教員と連携し、司書教諭や学校司書が多様な情報やワークシートを提供して、学校全体で指導

〈高〉 教員と学校司書が連携し、生徒一人ひとりの調べたい事柄にきめ細かく対応して、情報収集を指導・支援した職業調べ

学校図書館が核になって授業者や外部機関と連携して進めていくことがカギとなる。また、調べる方法やパスファインダー、レポートの書き方など、その時の授業だけでなく、その後の児童生徒の主体的な学習活動につながる実践となっている。

応募者の声

数学でも学校図書館が有効活用できるんだと認識してもらえた

応募することで活動の振り返りができたことが何より良かった

文科省の研修会に実践を動画で紹介された。ほかにもいろいろな研修会で報告させてもらった

パスファインダーなど学校司書の協力について授業者が伝えてくれたので、いろいろな教員が声をかけてくれるようになった

受賞を校長が職員会議で報告してくれ、職員全体に学校図書館の存在意義に気づいてもらった

学校全体で学校図書館の理解が深まり、新聞やデータベースへの予算が増えた

2 系統的な情報活用指導

教科単元別だけでなく、学年全体での取組み、さらには学校全体で取り組まれている実践がある。その実践が単年度ではなく、計画的に学年毎に、また学校全体として取り組まれている。

●学年で系統的に見通した取組み

・初めての探究学習／小学校（3年生）

	1 学期	2 学期（青字：発展させたこと）
課題設定の仕方	教員が設定	児童が自由に設定
情報源	本、百科事典	本、新聞、雑誌、データベース百科事典、ネット検索、リンク集、パスファインダー
情報収集の仕方	調べカードに記入 カード分け	情報カード（本用、Web 用） カードを精査し、目次も作成
まとめ方	冊子、紙芝居、ポスター	冊子、紙芝居、ポスター 端末でのまとめ

総合的な学習の時間は小学校3年生から始まる。司書教諭・学校司書・ICT教育担当・担任と話し合い、課題設定の仕方、情報源、情報収集の仕方を1学期と2学期と段階的に取り組んだ実践。

・初めての探究学習／中学校（1年生）

	1 学期	2 学期	3 学期
3年生			
2年生			
1年生	基礎①②		

情報活用スキルの習得

図書館での検索・探索／図書の吟味
情報の取捨選択／著作権への理解
引用と出典明記／事実と意見の区別
読者を意識したまとめ方／総合評価

基礎① 〈総合的な学習の時間〉

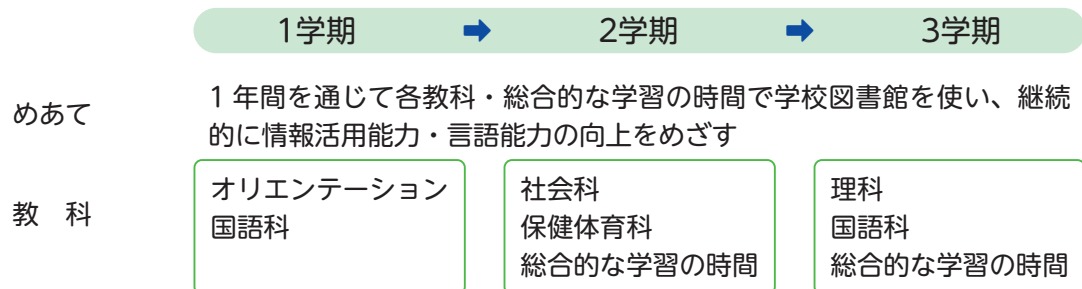
中学に入学して初めて取り組む総合的な学習の時間の探究学習を3年間の基礎と位置づけ、計画的に取り組んでいる。生徒自身の興味関心から、テーマを見つけ、図書資料を読み、必要な情報を取捨選択し、読者を想定してまとめる。完成した作品は Google classroom にアップロード・アーカイブ化するとともに学校図書館の蔵書とし、次代への資料としている。

基礎② 〈国語科＋総合的な学習の時間〉

中学校の全教科で探究的な学びの学習に対応するため、入学後の1年1学期に国語科の情報単元と総合学習の時間と合科で、「情報活用能力を身につけ、活用する」をテーマに取り組んでいる。学年教員の担当教科・体験の違いを超えて、学年全教員で情報を使う力をどう身に付けさせるか、情報活用スキル習得のための指導に取り組んでいる。

●1年間を通じての探究学習／中学校（1年生）

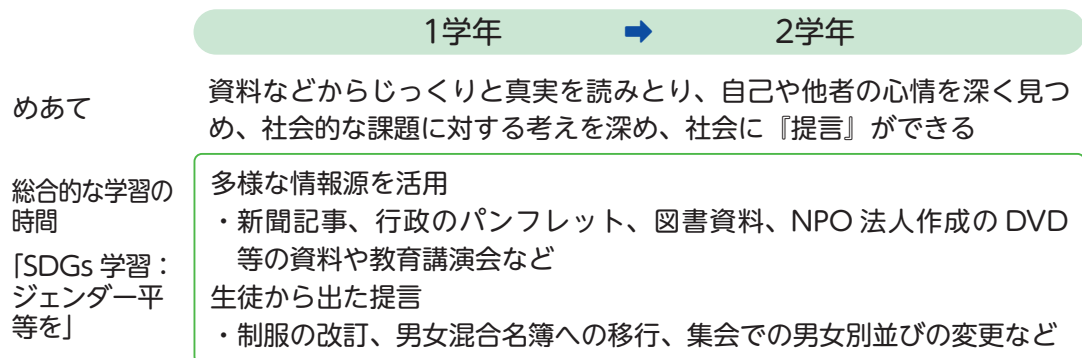
1年間通じて各教科や総合的な学習の時間で学校図書館活用を計画的継続的に行うことで、情報活用能力・言語能力の向上をめざしている。



国語科が他教科の授業にもアドバイザーとして授業計画に入ること、生徒の能力の「現在地」や「課題」を常に意識しながら段階を追った継続的な取り組みが進められている。

●2年間継続した中学校の取り組み（1年生・2年生）

学校全体として、情報を活用し協働活動を通じて生徒個人の考えを深め、行動化している。



●中学校・高等学校：スキルの獲得の明確化

獲得すべきスキルを冊子にまとめ、探究学習支援の見える化を図っている。

- ・中学校全体で、これからの社会における課題発見・課題解決に必要とされる資質・スキルを「探究スキル」として設定し、探究スキルを基礎的な学習スタイルと位置づけ、授業に教科のねらいと同時に情報活用能力の育成のためのねらいを明確に示し取り組んでいる。
- ・探究学習の取り組み方を冊子にまとめることで、工業高校の情報技術科においても、今までより情報源が多様になり、情報活用能力が高まっている例がある。紙とデジタルのベストミックス化がよりしっかりと図られることとなっている。さらに、どの教員も生徒への助言がスムーズに行えるようになっている。

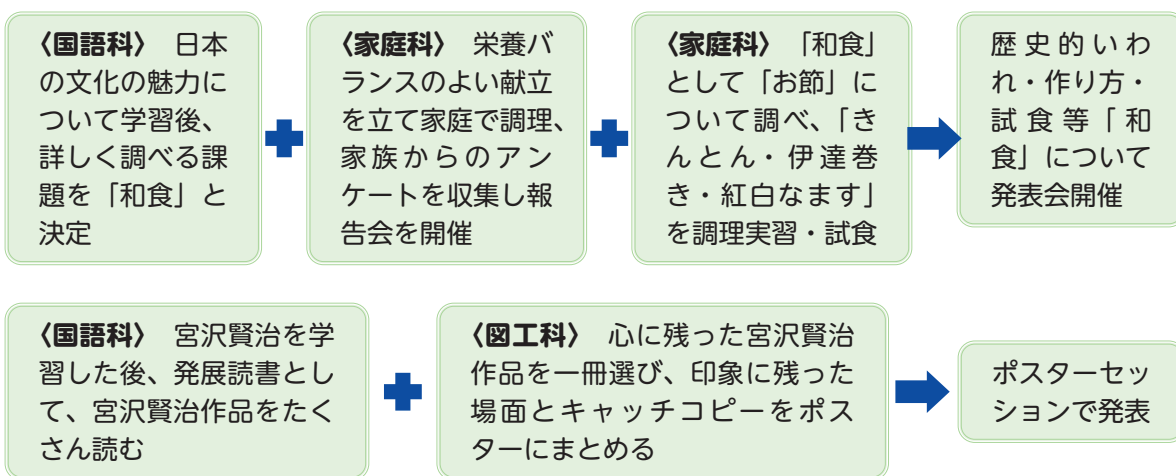
探究学習に向けての冊子

NDC、情報収集の仕方、情報検索の注意点、情報カード、参考文献の書き方、引用の仕方、スライドの作成の仕方、発表の仕方等を掲載

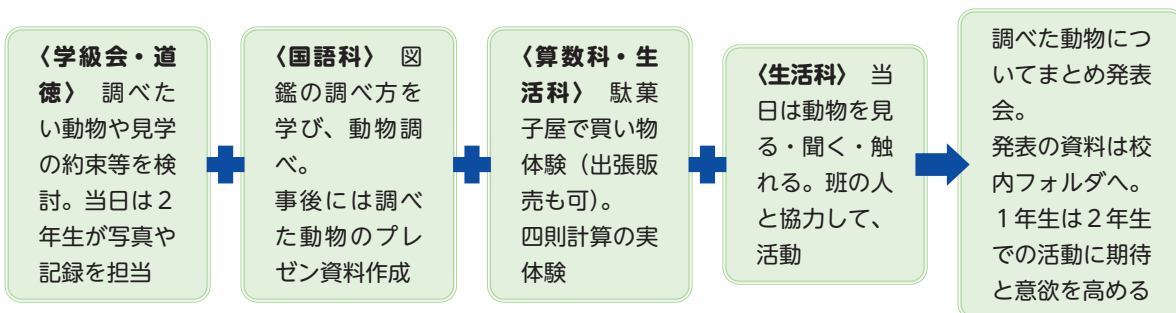
3 教科横断的な取組み

同学年で教科のねらいを明確に複数教科で連携した授業や、他学年との協働や次学年で学習する予定の内容を踏まえる計画等もあり、教科のねらいを明確にし、教科が連携し豊かな活動に発展している。

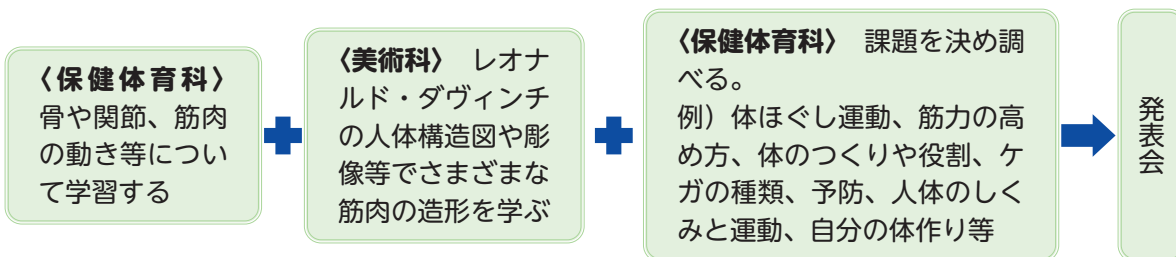
●〈小学校〉教科横断的学習の意味や良さを児童も実感でき、知識と体験で理解が深まる授業



●〈小学校〉校外学習で複数教科・複数学年（1・2年）と連携することで多様な関わりや学びが充実した授業



●〈中学校〉同一のテーマを複数教科で追究し多角的な見方を培う授業



4

外部機関との連携

●地域施設との連携

- ・市区町村役場 ・公民館、消防署、駅など
- ・観光案内所 ・商工会議所 ・地域の商店
- ・自治体アンテナショップ ・道の駅 など

学校図書館が多様な地元資料を収集し、インフォメーションファイルとして児童生徒の探究的な学びを支援

●公立図書館・専門図書館等との連携

図書を借りるだけでなく、年間指導計画や児童生徒が探究するテーマなどの情報も共有

探究学習のテーマを知らせておくことで、児童生徒が調べに行った時も、適切なレファレンスサービスが受けられるよう連携

●博学連携

地域社会の活性化に役立つことも博物館の使命の一つである。多種多様な博物資料に出会うことで、児童生徒が資料の価値や魅力に直接触れる重要な機会となる

- ・博物館 ・資料館 ・水族館
- ・動物園 ・歴史館 ・美術館 など

図書資料、Web サイトの情報だけでは解決できない疑問に対して、学芸員を招聘したり、オンラインでつないだりして、専門的な見地から講義してもらったり疑問に答えてもらったりすることで、児童生徒の学びの深化につなげる

●新聞社との連携

新聞記者などがゲストティーチャーとして学校に出向いて、新聞の基礎的な知識や新聞の読み方、編集の仕方、新聞記者の仕事のことなどをレクチャー

新聞社の記者の質問の仕方やメモの取り方、表現の仕方などを学び、地元商店街で実際に取材をした。また、実際に作成した新聞に対してコメントをもらい、次の学びに生かす

●企業との連携

学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の実現が重視されている。企業は、学校との連携を通じて社会的な役割を果たすことで社会貢献すること、次世代を担う人材育成にも貢献することになる

自分なりの仮説、推論を立てたうえで、企業の専門家の講義を受け、疑問点について質問するなど、課題を解決していく中で、学びを広め、深める

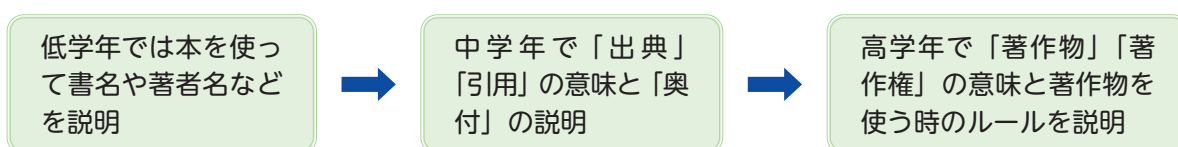
アウトプットの間としても活用！

児童生徒の個人情報に配慮したうえで、学びの成果物の発表の間にも活用！

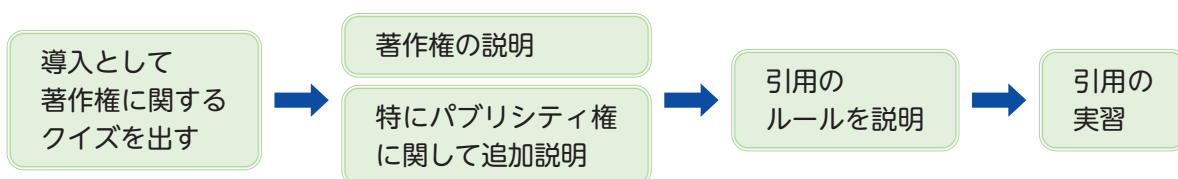
5 著作権と出典に関する指導

「引用の仕方」や「出典の示し方」は、学習指導要領解説国語編では、「情報の整理」として、小学校3・4年生、中学校1年生、高校「現代の国語」に位置づけられている。しかし、そのスキルを定着させるには、繰り返しの指導が必要となる。応募実践からは、探究的な学びの一環として指導したり、情報活用スキルに焦点を合わせた授業として指導したりしていることが見られる。以下はその一例である。

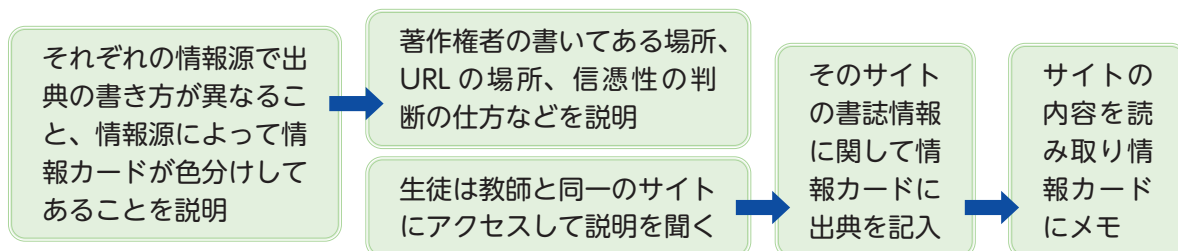
●小学校における著作権の指導



●中学1年探究的な学びの一環として「情報活用能力を身につけ活用する」授業



●高校「情報源の特性にあわせて適切な情報を記入する」授業



あなたの実践の応募を！

自校の学校図書館を活用した授業をやってみませんか。

印刷資料・デジタル資料・体験など、多様な情報の特質をおさえ、発達段階に合わせて使いこなすことで、豊かな教育活動となります。そして記録していきましょう。記録することが、実践の振り返りにもなり、蓄積にもなります。必ず次年度以降に役立ちます。

情報活用授業コンクール 授業実践ヒント集

2026年1月20日 発行

編著者 公益社団法人全国学校図書館協議会指導主事研修委員会

発行所 公益社団法人全国学校図書館協議会

〒113-0034 東京都文京区湯島3-17-1 湯島大同ビル

TEL.03-6284-3722 (代) FAX.03-6284-3720 <https://www.j-sla.or.jp/>

共通目的事業・助成事業



本事業は、一般社団法人授業目的公衆送信補償金等管理協会(SARTRAS)の共通目的基金の助成を受け実施されています